

## はじめに

---

本報告書は、2023年7月から2024年5月に開催されたシリーズセミナー「誰が子どものスポーツをささえるのか？」に基づいて作成している。笹川スポーツ財団では2016年から、小学生の母親を対象とした「小学生のスポーツ活動における保護者の関与・負担感に関する調査研究」を実施してきた。調査からは、以下の点が明らかにされている。

第一に、競技そのものに直接関わらない、子どもたちの世話などの役割を母親が担って「ささえる」ことで、子どもは習いごとやクラブチームなどの組織的なスポーツに参加できている。2021年の調査結果では、家庭内で子どもの送迎やスポーツ用品の購入に関わる頻度は、父親よりも母親のほうが圧倒的に高かった。また、チーム内での「お茶当番」や指導者・保護者間の情報共有も、主に母親が担う状況が示された。

第二に、その役割をめぐって多くの母親が葛藤している。インタビュー調査では、特にチーム内での役割に関して、長時間の拘束や理不尽な係の押し付け、保護者同士の人間関係など、さまざまな悩みが吐露されている。それでも「子どものため」と我慢しながら関わり続ける保護者も少なくない。少数ではあるが、うつ状態になる保護者の話も聞く。

第三に、「ささえる」ことが難しい家庭の子どもは、組織的なスポーツから離れる可能性がある。調査結果では、スポーツ活動に参加しない理由として約4~5割の母親が「送迎や付き添いの負担が大きい」「保護者の係や当番の負担が大きい」「保護者どうしの人間関係に気を使いそう」という項目を選択し、これらの回答には世帯年収との相関がみられた。つまり、母親自身の負担感からスポーツ活動への参加を控えるケースは、母親の意識の問題だけではなく、家庭の経済状況や余裕度も関連していると考えられる。

以上の結果はメディアにも取り上げられ、当事者である母親をはじめ、この状況に関心を寄せる多くの方々から賛同の声が届いた。一方で、「課題は理解できたが、具体的にどうすればよいのか」「母親が担わないのであれば、誰がやるのか」という疑問の声もあがった。

しかし、この問題に特効薬のような解決策はないと考える。スポーツの課題と社会全体のジェンダーや子育ての課題が交差する複雑な問題であり、最終的にはそれぞれの現場に適した解決策を模索するしかない。それでも当財団の問題意識にとどめることなく、複数の方の知見や考えを共有し、実践や研究を通して改善につなげることはできないか。そのような思いから、本シリーズセミナーを開催した。第1回と第2回では研究者の方々に、なぜ母親は大変な状況に置かれているのか、国際比較やジェンダーの視点から講じていただいた。第3回と第4回では具体的な解決策に焦点をあて、近年新しく立ち上がったチームの仕組みや、子どもや保護者との向き合い方について紹介いただいた。セミナーには事務局の想定を上回る多くの方々にご参加いただき、終了後にも複数のクラブからご連絡をいただいた。一部のクラブへの取材内容を2章にまとめている。

今もなお、つらい経験を語る保護者が後を絶たない。しかし、子どもも保護者も共にスポーツを楽しめる環境や、理不尽な状況を「理不尽だ」と指摘できる風土は、確実に広がりつつある。子どものスポーツの選択肢をさらに広げ、適切な情報を届けることが、スポーツ関係者に求められる役割である。本書がその一助になれば幸いである。

2023-2024 シリーズセミナー 誰が子どものスポーツをささえるのか？ コーディネーター  
笹川スポーツ財団 宮本幸子